

# 意見陳述書

2017年3月16日

金沢地方裁判所 御中

原告 宇治谷 明美

## 1. はじめに

私は2010年3月に富山県庁を定年退職しました。それまで労働組合女性部の活動に関わってきました。そこで学んだことは、経済優先ではなく、一人ひとりが大切にされる社会・個人の尊厳を大切にすることです。そうした活動を退職後もできないかと思っていたときに、富山県氷見市出身の鎌仲ひとみさんが監督された「ミツバチの羽音と地球の回転」の自主上映をしませんか、との呼びかけがありました。この映画は「ヒバクシャ―世界の終わりに」（2003年公開）、そして「六ヶ所村ラブソディ―」（2006年公開）に続く長編ドキュメンタリーです。

「ヒバクシャ」「六ヶ所村ラブソディ―」それぞれ、原爆による放射能被害や原子力発電所建設に伴う市民運動等を丁寧に描いており、その続編としての「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映はとてもよいタイミングでした。

## 2. ここで生きていく決意が世界を動かす―鎌仲監督メッセージ

これは、「ミツバチの羽音と地球の回転」を作った鎌仲監督からのメッセージです。  
**エネルギーのその先に何があるのか？ どんな現実が進行しているのか？**

石油もウランも有限であると知りながら、そこから降りることがなかなかできずに今、世界は混乱し、相変わらず日本は原発を建て続けている。そのつけは瀬戸内海の小さな島、祝島にも及び、島の人々はもう28年も建設を阻止するために闘ってきたが、巨大な経済が計画を加速させてきた。

誰かが、ではなく自分たち自身でエネルギーの未来を切り開くそんな決意を持って生活を守る人々がいる。脱石油・脱原発を決め、持続可能な社会へと舵を切った、スウェーデンにも同じ意思を抱いた私たちと同じ普通の人々がそれぞれの課題に取り組んでいる。では、私たちの選択はどこにあるのか、私たち自身はどうするのか、新たな扉が開かれる。

この映画上映を通じて、私たちが生きていくうえで切り離せない「エネルギー」について、危険な原発ではなく、自然と共生した持続可能なエネルギーの選択という新たな扉を開くことが可能であると確信をもつことができました。

しかし、このときチェルノブイリに続き、福島第一原発事故が起きるとは予想だにしていませんでした。

## 3. 2011年3月11日、福島第一原発事故を経験して

今から6年前の3月11日、福島第一原発事故（以下「福島原発事故」）が起き

ました。地震や津波は天災ですが、福島原発事故は人災です。原発は安全だという安全神話をもろくも崩れ去り、今日に至るまで、被災された人々からそれまでの生活を奪い、慣れ親しんだ土地を奪い、愛する人や物を奪いました。

事故から3年後、飯館村に行く機会がありました。この村は未来を担う子どもたちを村全体で大切に育ててきたところですが、建てられてからあまり年数の経っていない木造校舎には、子どもたちが楽しく学んでいた形跡があちらこちらに残され、耳を澄ませば、子どもたちの笑い声が聞こえてくるような気がしました。

そんな子どもたちがこの原発事故を機に、全国各地にちらばり、昨今では、避難先で「放射能がうつる」「ばい菌がうつる」といじめの対象にされているという報道もされています。

原発事故の正しい知識を学ぶ機会がなかった、ということもあるかもしれませんが、原発事故が起きなければ、こうした事件も起きません。住み慣れた地域で愛する人々と一緒に暮らす、という当り前のことが当り前でなくなったのが今回の福島原発事故です。これは福島だけのことでしょうか。地震列島の日本では、原発を抱えている地域すべてに共通することではないでしょうか。

未来のある子や孫に、何としても原発のない社会を残したい、と原発事故から6年、毎週水曜日の12時から13時まで、北陸電力本店前で「ランチタイムアピール」を行っています。ときには、通りかかった人が「原発再稼働反対の署名やカンパ」をしてくださったりもして、それに励まされ、今日まで継続しています。

そして、「志賀原発差止め訴訟の原告にならないか」との呼びかけにも、ためらうことなく承諾もしました。

#### 4. 志賀原発を廃炉に

①原子力発電は、原料になるウランの採掘から放射性廃棄物の処理・処分まで、放射能と切っても切れません。地球の環境を汚染し、住民の健康を蝕む上に働く人々の被ばくを前提にしなければ動かせません。

また、原発のコストは安いと言われていますが、原発のバックエンドの費用や、事故による補償金などもきちんと勘案されていません。

さらに、いざというときのバックアップのために火力発電所を温存しておかなければならず、結局余分な設備投資が行われ、それらの費用は総括原価主義に基づく電気料金により、消費者から徴収されています。

②2016年12月29日の北陸中日新聞で「志賀原発の雨水流入」を取り上げていました。

「能登地方が大雨に見舞われた9月28日、冠水した道路の工事現場から、原子炉建屋内に雨水6600リットル（一般家庭の浴槽にすると約30杯以上）が流れ込んだ。水は電源ケーブルを通すすき間などを伝って地下まで及び、照明用分電盤にかかって漏電した。あと20時間流入が続けば、全ての安全機能が喪失する恐れがあった。国の原子力規制委員会でも福島第一原発事故を引き合いに『被水の恐ろしさはまさに福島で経験したこと』と、危機管理体制について厳しい意見が相次いだ。」（以下略）というものです。

さらに2016年10月25日付けの北日本新聞社説では「北電が工事中の排水路に

設置した仮設ポンプは、1時間当たり6ミリという通常の雨量に対応する排水能力しかなかった。しかも、地下空間につながるふたの下に仮設ケーブルを通していたため隙間ができていた。排水槽の水位上昇を示す警報が鳴っても現場の状況を確認していなかった。地下空間から原子炉のある建物にケーブルを通した貫通部分の止水対策がとられていなかった。コンクリートが乾燥する過程で収縮してできる床のひび割れが未修理だった。これらは『想定を超える』事態が起きたわけではない。激しい雨への備えをしない、雨が降っても穴のふたが開いている、警報が鳴っても動かない、というのでは、原発の運用力を疑われかねない。規制委がこうした北電の現場の実態にもがくぜんとしたのは明らかだ」と、運用力に疑問符がつく見出しで厳しい指摘がされていました。

漏電事故は初歩的ミスであり、事後報告の遅れ等に現れているように危機管理能力に欠けているのではないのでしょうか。つまり、危険極まりない原発を運転する資格が無いのではないのでしょうか。

③さて、志賀原発は能登半島の首のような場所に建設されています。このために原発北側にすむ住民にとっては風向きによる避難先の選択肢はなく、事故時にはより早く能登半島先端に向かって逃げるしかありません。そして先端に住む珠洲市の住民はそこから先の避難場所がありません。また、原発南側の30キロ圏には氷見市を含め約14万人が住んでいます。こちらも避難ルートが限られています。加えて、能登半島は年間約700万人の観光客が訪れる観光地です。

かつてアメリカのショーラム原発は電力会社の避難計画の不備を住民に裁判で訴えられ一度も稼働することなく廃炉になっています。

北陸電力のホームページには「福島第一原子力発電所のような事故を起こさない決意のもと、志賀原子力発電所の安全対策に全力で取り組んでいます」と掲載されています。

安全対策はそこで住む住民の安全を確保するためのものであり、そうした観点から、キチンとした避難計画が立てられない志賀原発は運転すべきではないといえます。

④また、有識者会合で3年有余の長きにわたり検討されてきましたが「志賀原発1・2号機とも重要施設の直下に活断層があることは否定できない」という結論が出されました。

こうしたことから、志賀原発は廃炉にするしかない、と思います。

昨今、食の地産地消が言われていますが、これはエネルギーも同じです。これまでのような大規模な原発ではなく、その地域に相応しい持続可能なエネルギーに転換していけば、送電ロスも少なく、しかも地域に雇用も生み出す。これは、鎌仲監督が世界各地で取材した「みつばちの羽音と地球の回転」でも触れられています。

北陸電力が一番最初に「志賀原発を廃炉」にし、水力を始めとする自然エネルギーにシフトをすれば、企業のイメージアップにもつながるのではないのでしょうか。

裁判所におかれましては、一人ひとりの命を大切にされるよう、志賀原発の運転を差し止める判決を一日も早く出されることを心よりお願いいたします。